

九州アメリカ文学会 12 月例会・多民族研究学会第 44 回全国大会プログラム

共催：多民族研究学会（MESA）／九州アメリカ文学会（KALS）

協賛：福岡女子大学

会期：2025 年 12 月 20 日（土） 12 月 21 日（日）

会場：福岡女子大学 講義棟 C101（〒813-0003 福岡県福岡市東区香住ヶ丘 1 丁目 1-1）

オンライン参加者（1 日目 12:50～18:00、2 日目 10:00～12:30）

オンライン参加を希望する方は下記連絡先までお知らせください。接続情報をお伝えします。

KALS 例会担当： [s-matsushita@\[cb.kiu.ac.jp\]](mailto:s-matsushita@[cb.kiu.ac.jp]) （担当：松下）

MESA 事務局： [multiethnicstudiesjp@\[gmail.com\]](mailto:multiethnicstudiesjp@[gmail.com])

[@]を@に変えてください

【1 日目】 12 月 20 日（土） 12:15 受付開始

全体司会：吉津京平（YOSHIZU Kyohei）（北九州市立大学）

開会の辞 12:50-13:00

長岡真吾（NAGAOKA Shingo）（MESA 会長）

大島由起子（OSHIMA Yukiko）（KALS 会長）

研究発表 1 13:00-13:45

司会者：清水菜穂（SHIMIZU Nao）（宮城学院女子大学）

発表者：山口沙瑛（YAMAGUCHI Sae）（九州大学大学院）

題目：食^{くら}う「物」たち —— *Tar Baby* における食、自然、肉体

研究発表 2 13:45-14:30

司会者：齊藤園子（SAITO Sonoko）（北九州市立大学）

発表者：LIU Jing（リュウ・ショウ）（福岡大学大学院）

題目：Different Cultures, Similar Stories: *The Wonderful Wizard of Oz* and *Journey to the West*

休憩（15 分）

研究発表 3 14:45-15:30

司会者：牧野理英（MAKINO Rie）（日本大学）（＊オンラインによる司会）

発表者：遠藤緑（ENDO Midori）（鳥取短期大学）

題目：*Tropic of Orange* における女性の身体的イメージと民族性

研究発表 4 15:30–16:15

司会者：大場健司 (OBA Kenji) (九州女子大学)

発表者：Eugenia PRASOL (ユージニア・プラソル) (長崎大学)

題目：Comparative Perspectives on Mythic Revisionism in Natsuo Kirino's
The Goddess Chronicle and Madeline Miller's *Circe*

休憩 (15 分)

講演 16:30–18:00

司会者：永尾悟 (NAGAO Satoru) (熊本大学)

講演者：藤永康政 (FUJINAGA Yasumasa) (日本女子大学)

題目：「野獣の臍腑のなかで」——黒人自由闘争の語り方

懇親会 18:30～

会場：福岡女子大学カフェラウンジ (空とたね)

司会者：Sophia Hana DICKEY (ソフィア・ハナ・ディッキー) (四国大学)

【2 日目】 12 月 21 日 (日)

トークセッション 10:00–12:00

テーマ：<排外主義> の時代における人文学

司会：角尾宣信 (TSUNOO Yoshinobu) (和光大学)

発表者：

塚田麻里子 (TSUKADA Mariko) (明治大学)

サイドから見た T・E・ロレンス

古東佐知子 (KOTO Sachiko) (神戸女学院大学)

アフリカ系アメリカ人の文学から考えるマイノリティーと排外主義

竹内勝徳 (TAKEUCHI Katsunori) (鹿児島大学)

アメリカにおける排外主義の一事例とトランプ政権

鈴木章能 (SUZUKI Akiyoshi) (長崎大学)

グローバルな想像的共同体の中の遠くの他者への責任

閉会の辞 12:00～

竹内勝徳 (TAKEUCHI Katsunori) (鹿児島大学)

お問い合わせ： 多民族研究学会事務局

〒350-1110 埼玉県川越市豊田町 1-1-1

尚美学園大学芸術情報学部情報表現学科河内裕二研究室内

E-mail: multiethnicstudiesjp@gmail.com

研究発表・講演・トークセッション要旨

研究発表 1

食^{くら}う「物」たち —— *Tar Baby* における食、自然、肉体

山口 沙瑛（九州大学大学院）

Toni Morrison の作品は人種、ジェンダー、階級をめぐる人々の衝突や詩的な身体描写、語りの巧妙な技法を多分に含み、それらは度々議論の的となってきた。だが物語を動かすのは、人や人を中心としたテーマだけではない。登場人物たちを囲む「物象」—動植物、飲食物、衣服、建築物、家具—は、彼らの気付かぬうちにその内部へと侵入し、物語全体を飲み込んでいく。Morrison の作品の中でも *Tar Baby* は、大量生産・消費される商品だけでなく、舞台となるカリブ海の島の自然からも、巨大な不可視の力を読み取ることができる。そして、パリで高等教育を受けた Jadine や自然に囲まれた暮らしを望む Son はもちろん、一見、物を支配する側に見える、キャンディー会社の元社長 Valerian もその影響から逃れることはできない。本発表は *Tar Baby* における「物」の視線や動きに注目することで、人間中心の思考から解放された、作品の新たな可能性を照らし出す試みである。

研究発表 2

Different Cultures, Similar Stories: *The Wonderful Wizard of Oz* and *Journey to the West*

Liu Jing（福岡大学大学院）

If the classic American fantasy is *The Wonderful Wizard of Oz* (1900) by L. Frank Baum (1856-1919), then the classic Chinese fantasy is *Journey to the West* (1592) by Wu Cheng'en (1504-1582). There are many differences between the two books, including their cultural backgrounds, religious influences, and narrative tones. However, the similarities between them are also fascinating and worth exploring. This presentation compares the two stories by examining the following aspects: their backgrounds and genres, the structures of their journeys, and their companions and teamwork. By analyzing these elements, we can better understand how stories from different cultures can share common narrative patterns while still expressing distinct cultural values, and we can observe remarkable similarities in their narrative structure and in their thematic elements. Every culture has its own gods, its own heroes, and its own tales of adventure. These repeated story patterns suggest that all humans share a similar way of imagining the world. Therefore, we can regard *The Wonderful Wizard of Oz* and *Journey to the West* as two ways of

telling the same kind of story about the human need to find meaning, face challenges, and discover where we belong.

研究発表 3

Tropic of Orange における女性の身体的イメージと民族性

遠藤緑（鳥取短期大学）

本発表では、Karen Tei Yamashita の *Tropic of Orange* (1997) に登場する日系アメリカ人女性 Emi に着目し、Emi の身体的イメージが民族性や民族的記憶を再定義する可能性を考察する。

Tropic of Orange は、七人の主要登場人物の物語を交差させた作品である。Emi はテレビプロデューサーで、日系アメリカ人のステレオタイプから外れるような型破りな言動が特徴的である。Yamashita は、Emi は作品の mouthpiece であり、trickster であると言っており、Emi の性格付けには特定の意味があることを示唆している。物語が進むごとに Emi の身体はメディアに取り込まれていくようにも読め、アジア系女性と結びつけられる有色のサイボーグを思わせる。Emi の身体性の希薄さは、もう一人の主要な登場人物であるメキシコ系の女性 Rafaela と比較すると特に顕著である。

こうした Emi の特異性が日系アメリカの集団的アイデンティティからどのように逸脱しているかを例証しながら、本作品が日系アメリカ文学という領域自体を問い直している可能性についても考えたい。

研究発表 4

Comparative Perspectives on Mythic Revisionism in Natsuo Kirino's *The Goddess Chronicle* and Madeline Miller's *Circe*

Eugenia Prasol（長崎大学）

This presentation examines mythic revisionism in Natsuo Kirino's *The Goddess Chronicle* (2008) and Madeline Miller's *Circe* (2018), addressing Adrienne Rich's idea of "re-vision" as "the act of looking back, of seeing with fresh eyes" and Alicia Ostriker's "revisionist mythmaking" as women writers' challenge to patriarchal mythic narratives. Both novels address myths by placing traditionally marginalized female figures at the centre. Kirino, a Japanese author, depicts Izanami, the death goddess of the Kojiki, transforming her from an evil monster into a complex character with her own story. Through Izanami, Kirino explores the themes of sisterhood, sacrifice, anger, violence and defilement. Miller reconstructs Circe from Homeric epic, rejecting the one-dimensional image of a seductress and obstacle in

the hero's journey. Miller, an American author, presents a vulnerable protagonist who struggles with exile, motherhood, the search for identity and creativity through witchcraft. By comparing these cross-cultural retellings of East and West and giving attention to the motif of the island, this presentation explores how mythic traditions are reinterpreted through feminist lenses. It highlights how new retellings reclaim the female subjectivity of previously silenced figures and demonstrate the cultural

講演

「野獣の臓腑のなかで」——黒人自由闘争の語り方

藤永康政（日本女子大学）

強権ぶりを増したトランプ政権は、国際秩序のみならず、「自由主義世界の盟主」という自己像をも破壊している。その結果、従来のアメリカ研究の教科書はもはや有効性を失いつつある。多くの教科書は、理念の共和国アメリカが理想を実現していく過程を描く構えをもち、レイシズムを健全な自由主義国家に時折生じる「病理」として捉えてきたからである。黒人史も例外ではなく、キング牧師の語る「夢」も理念実現の果ての「アメリカン・ドリーム」として位置づけられていた。いまや、このアメリカの物語は説得力をもたない——若者の多くにとってアメリカは憧憬の対象ではなく、暴力的な国家にすぎない。

ところで、かつて学生非暴力調整委員会の活動家は、黒人の境遇を「野獣の臓腑の中」と表現した。アメリカは人びとが仰ぎ見る「丘の上の町」ではなく、野獣だったのだ。このような観点から、黒人自由闘争を語ること、その現在的な意味を問いかけてみたい。

トークセッション

＜排外主義＞の時代における人文学

角尾宣信（和光大学）

多民族研究学会（MESA）と九州アメリカ文学会（KALS）の合同学会として、ライトニング・トーク型のトークセッションを試みます。通常のパネル・セッションよりも短い持ち時間で、両学会から各2名計4名が、それぞれの知見から話題や論点を提示し、それを踏まえ、フロア全体に議論を開いていく形式です。

本セッションでは、前半で各発表者が、一般的なライトニング・トークよりはやや長めの10分程度の持ち時間にて論点を提示しますが、このセッションの趣旨はフロア全体へと対話を広げていくことにあります。

全体テーマは、「＜排外主義＞の時代における人文学」です。外国人／移民排斥の動きをはじめとする世界的な排外主義の高まりをめぐって、現在の政治・社会・文化状況の諸問題を、私たち人文学研究者はどのように捉えうるのでしょうか。また、様々な「危機」の時代状

況に対し、私たちは研究・教育活動を通して、どのように人文学の有効性を示すことができるでしょうか。

そして、「分断」の時代状況として、対話自体が困難になっていると言われるなか、対話の可能性を実践的に探っていくことも、本セッションの主要な目的の一つです。合同大会の特質を活かし、多彩な研究者が集う参加型セッションとして、個々の研究の知見を持ち寄りながら、共に人文学の課題と可能性を探っていきたいと思います。皆様の積極的なご参加を歓迎いたします。

アメリカにおける排外主義の一事例とトランプ政権

竹内勝徳（鹿児島大学）

ドナルド・トランプの強力な支持基盤としてユダヤ系の団体があり、彼自身がイスラエル支持を訴えていることはよく知られている。マーク・トウェインが観察したように、ユダヤ教徒やシオニストは19世紀以来、排外主義の対象となりつつも、キリスト教徒と合流しながらアメリカ社会に定着してきた。20世紀に入ると、イギリスとアメリカが主導して、イスラエル建国に動いたが、これが現代における中東の紛争の原因となっている。ユダヤ教徒のアメリカへの適応は価値の多様性の一例であると言って良いと思うが、一方でそれがリベラリズムを突き動かし、イスラエルやその他の親米国を通してアメリカのグローバル政策を推進してきたと言える。当のトランプはDEI(Diversity, Equity, Inclusion)の是正を求めて圧力を強めているが、それは彼の支持基盤であるユダヤ系コミュニティに対する大きな矛盾であるように思える。

グローバルな想像的共同体の中の遠くの他者への責任

鈴木章能（長崎大学）

互いの否定を禁じた多様性の尊重は論理的に自民族中心主義と格差のある資本主義社会の強化を内包していると、かつてW. B. マイケルズらは警告した。また、柄谷行人らは、強制的同質化を否定し多様性を保持するのが「帝国」(empire≠imperialism)の常套手段という。多様性を強調しながらも、人々に特に新自由主義の価値観を共有させるグローバリズムをアメリカニズムの「帝国」と捉えるとき、アメリカがその玉座から去りつつあるいま、グローバル資本主義における多様性のユートピア的追求は、玉座の争奪戦とあいまって、世界的に排外主義のディストピアを招来している。こうした見立てにおいて、人文学は何をすべきか。多様性の尊重が排外主義に反転するのは、多元主義的理解の場合、つまり、T. クーンばりの絶対的・排他的な差異の尊重である。それを打破するために、たとえば、マイケルズは「議論」を主張した。ここでは、差異は類似性の中にしかないという立場から、また経済学の父・アダム・スミス以来文学のモチーフとなってきた「遠くの他者」への責任論を

踏まえ、多くの文学を読み、多様な人々との議論や異なる文化や言語越えたものどうしの翻訳可能性をもって、共感的理解にいたる方法を提示してみたい。

アフリカ系アメリカ人の文学から考えるマイノリティーと排外主義

古東佐知子（神戸女学院大学）

マイノリティーと排外主義を論じる際、アメリカ社会におけるアフリカ系アメリカ人への長期的な排除は大きな問題として存在してきた。しかし同時に、マイノリティー側から生じる排外の力学にも目を向ける必要がある。今回はまず、アフリカ系アメリカ人文化の中心地とされるハーレムの文化を、アーカイブ化し保存しようとする近年の動向に着目する。ギャトリ・C・スピヴァクは、こうした文化的空間に境界を設け「黒人文化の場」と固定化することが、アイデンティティー主義へと傾き、他者を排除する危険性を孕むと指摘する。また、アルジュン・アパデュライは、マイノリティーによる暴力を「少数派の恐怖」という視点から分析し、排外主義が相互に循環する構造を明らかにした。排外性が強まる今日、他者を想像し理解する契機をいかに確保できるのか。アフリカ系アメリカ人文学を通して、人文学の可能性を考察したい。

サイドから見た T・E・ロレンス

塚田麻里子（明治大学）

現在のイスラエル・パレスチナ紛争は、第一次世界大戦後のイギリスをはじめとする列強の負の遺産であるのは言うまでもない。T・E・ロレンス（アラビアのロレンス）がそこに関与しているという事実もよく知られているが、実際に彼が果たした役割については、歴史家は重視してはいない。だが、中東で何かあるたびに彼の名が言及されるのも確かであり、ロレンスの「英雄像」が与える影響を見過ごすことはできない。

かつて、サイドは『オリエンタリズム』においてロレンスを厳しく批判した。ロレンスがアラブの歴史を「私的ヴィジョン」に取り込もうとしているという彼の指摘は、一面において正しい。一方、中東特派員 R・フィスクは、ロレンスの言葉を想起する重要性を説き続けた。どちらも、過去を通して現在に向き合おうとする点では同じだろう。

今回注目したいのは、2003 年サイドが同書の「25 周年記念版」に書き加えた序文である。イラク戦争の勃発、パレスチナ自治区への激しい武力攻撃、巨大な「隔離壁」の建設——こうした状況下で彼が語る「人文学（人文主義）」を再考するとともに、この視点からロレンスを捉え直すことも試みたい。